

オーガナイザー：植村玄輝(岡山大学)

池田真治(富山大学)・稲岡大志(神戸大学)・坂本邦暢(東洋大学)

過去の哲学者やその学説に関する哲学史的な研究が、「この研究に哲学的な意義があるのか」という問題に直面しがちだということ、日本の哲学アカデミアのなかで広く認知されているといういいはずである。こうした事情を背景に、日本哲学会でも、2017年大会のシンポジウムとして、「哲学史研究の哲学的意義とは何か？」が企画された。本ワークショップのオーガナイザーも提題者として登壇した同シンポジウムは、哲学史研究と哲学研究の関係を論じるにあたって考慮すべき事柄をあらためて整理し、今後の議論を実り豊かにするための土台作りで一定の貢献をしたように思われる。とりわけ、属する世代と(もっとも狭い意味での)専門領域の異なる研究者が提題をすることで、同シンポジウムは、この問題に関する論点や切り口の多様さを洗い出した。こうした成果を受けて次に必要とされるのは、「哲学史研究の哲学的意義とは何か？」という問題にまつわる個別の論点について、より個別的な場面に即して議論を深めることだろう。この課題に応えるために、本ワークショップでは、「哲学史研究におけるアナクロニズム(時代錯誤)」という問題について、ライブニッツの数理哲学を事例としたケーススタディを行う。

ここでいう「アナクロニズムの問題」とは、大まかに言えば、過去の哲学者やその学説に関する研究に、現代の術語・概念・問題などを持ち込むことの是非をめぐる問題(を、どちらかといえば「非」の側の観点から表現したもの)である。この問題は、哲学史研究が置かれたいささか特異な状況を、とりわけよく浮き彫りにしているように思われる。すでに述べたように、哲学史研究には哲学的な意義が求められる傾向にある。ここで問題になるのはどうぜん現代の私たちにとっての哲学的意義であって、研究対象となっている時代の人々にとっての意義ではない。こうした要求に応えるために、いま流通している哲学の術語・概念・問題を用いて哲学史研究を行うことは、(必須であるかどうかはさておき)きわめて有効な手段となる。過去の哲学の術語・概念・問題よりも(少なくとも相対的に)馴染みがあり、(少なくとも相対的に)明確な定義や定式化が施されたそれらに訴えることは、自分の研究の哲学的意義を認めさせたい相手と疎通を行うことを容易にするからである。しかしこうした試みには、過去の哲学者により歴史的な関心からアプローチする、科学史やインテリクチュアル・ヒストリーなどの分野の歴史研究者たちから厳しい批判がなされてきた。哲学史を研究することの眼目は、過去の哲学者やその学説をまさに過去のものとして理解することにあるのだから、ターゲットとなる哲学者やその同時代人が知る由もない術語・概念・問題を利用した再構成は、少なくとも哲学史研究の主要な目的ではなく、場合によってはこの目的を阻害するというのである。

このように、哲学史研究は、一方の(主に哲学アカデミアの住人や哲学に期待を寄せるその他の人たちからの)哲学的な意義の要求と、他方の(主に歴史家たちからの)歴史研究としてのまともさの要求のあいだで板挟みの状態にある。アナクロニズムの問題にどのように対応するかは、二つの要求に対する態度を決めることにほかならないのである。哲学的な意義を優先するのか、それとも歴史研究としてまともであることを選ぶのか、そもそも二つの要求はトレードオフの関係にあるものとしていつでも理解さ

れなければならないのか——こうした問題を、ここでまずもって問わなければならない。また、哲学史研究において避けるべきである(とされる)アナクロニズムの正確な内実を突き止めることも必要である。過去を過去のものとして理解するのが歴史研究の眼目だとしても、そうした理解の主体がいうまでもなく現代の私たちである以上、私たちがいま手にしている哲学上の術語・概念・問題は、歴史としてまともであろうとする哲学史研究にとっても、完全に切り捨てることのできるものではないだろう。そうだとすると、いま私たちが手にしているリソースを(どのように)使うべきかは、個別の事例に即して判断されるべき事柄だということになる。

以上からもわかるように、哲学史研究におけるアナクロニズムという問題は、ケーススタディという形式で取り上げるにふさわしい。では、なぜそこでライブニッツの数理哲学なのか。ライブニッツは、哲学史上の重要人物であることが広く認められているものの、一次資料の編纂が現在も進行中であるという事情も手伝って、現代的な哲学的関心からも、より歴史的な関心からも、さまざまな研究の可能性を残した哲学者である。そして、扱った問題の広範さゆえに、ライブニッツは、哲学的な意義が特に求められないような文脈、たとえば科学史やインテリクチュアル・ヒストリーにおいても主題となりうる哲学者でもある。こうした事情を背景に、ライブニッツを主題とした哲学史研究では、先に述べた二つの要求を背景とした、研究者のあいだの対立や葛藤が特に顕著に見られるのである——このことは、本ワークショップの提題でも確認されることになる。以上を踏まえたとき、数理哲学という話題は、特に興味深いように思われる。ライブニッツの時代までに登場した数学の概念(証明、定義、記号、矛盾、関数など)は、現在まで特に深い断絶なく数学において用いられてきている。そのため、ライブニッツの数理哲学に関する哲学史的研究において避けられるべきアナクロニズムがあるとしても、それが何なのかを突き止めるためにはかなり繊細な議論が必要になるからである。

以上の点を含め、本ワークショップでは、先に述べた二つの要求を受け止めつつライブニッツの数理哲学について研究する池田の稲岡の2名が、アナクロニズムの問題について提題を行う。池田の提題は、無限小の概念や連続体の問題にまつわる哲学的な関心の追求が、ライブニッツの数理哲学に関する哲学史研究とどのように関係するのかについて、自身の研究が直面する問題に触れながら報告する。それに対して稲岡は、図形推論や空間概念の数学的表現に関する現代の議論を手掛かりにしたライブニッツ研究というプロジェクトを題材として、主に哲学史の方法論について報告する。これら二つの提題を通じて、哲学的な意義の要求と歴史研究としてのまともさの要求にどのように応えるべきかに関する両者の見解の相違が、ライブニッツの数理哲学という共通の背景のもとで浮き彫りになることが期待される。次に池田と稲岡の提題に対して、科学史/インテリクチュアル・ヒストリーという観点からライブニッツに関心を寄せる坂本がコメントを行う。これによって、哲学的意義の要求を大きく引き受ける池田・稲岡の見解が、そうした要求が特に重要にならない文脈でどのように評価されるのかの一端が示されるだろう。これらの報告とそれを題材としたディスカッションによって、哲学史研究と哲学の関係という一筋縄ではいかない問題について、議論の共有を進めることができれば、本ワークショップは成功裡に終わることになる。